

日本語の右枝節点繰上げと削除分析*

木村宣美

0. はじめに

日本語には、次の(1)に示されているように、右枝節点繰上げ(right node raising: RNR)構文(以降、RNR構文)がある。

- (1) John-ga Mary-ni, sosite Bill-ga Susan-ni kisusita
John-NOM Mary-to and Bill-NOM Susan-to kissed
'John (kissed) Mary, and Bill kissed Susan.' (Sohn 1999: 367)

(1)は、動詞 *kisusita* 'kissed' が等位項に共通に生じている RNR 構文である。このような日本語の RNR 構文に対して、Saito (1987) は RNR 構文の共通要素 (RNR 要素) の右方移動に基づく分析、Sohn (1999) はかき混ぜ (scrambling) による顕在的移動 (overt movement) が適用された記号列に音声形式 (phonetic form: PF) 部門での削除が適用されるとする移動と削除に基づく分析、Mukai (2003) は構成素性 (constituency) を考慮しない記号列削除 (string deletion) に基づく分析、Kato (2003, 2006) は等位構造に特有な構文であることを捉えるために AND Copy を提案し、素性 [+ focus] を仮定する焦点化移動 (focus movement) に基づく分析、Sato (2010) は Williams (1997) の等位構造削除 (coordinate ellipsis: CE) と 従属部削除 (dependent ellipsis: DE) に基づく分析、Abe and Nakao (2010) は記号列空虚移動 (string vacuous movement) に基づく分析を提案している。¹ 日本語の RNR 構文の

* 本稿は、日本中部言語学会第57回定例研究会(平成23年12月17日 静岡県立大学)での研究発表「日本語の逆行等位構造縮約」の内容の一部に、加筆修正を施したものである。なお、本研究は、平成22年度-平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)研究課題『句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係に関する理論的・実証的研究』(課題番号22520487))及び平成26年度日本学術振興会科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C)研究課題『右方移動現象の分析に基づく併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムの解明』(課題番号26370557))に基づく研究成果の一部である。

¹ (1)の逆行等位構造縮約(backward conjunction reduction: BCR)構文(以降、BCR構文)に対する分析として、空所化(gapping)に基づく分析(空所化分析: Kato (2003, 2006), Sato (2010))と右枝節点繰上げ(RNR)に基づく分析(RNR分析: Saito (1987), Sohn (1999), Mukai (2003), Abe and Nakao (2012))が提案されている。この点に関して、特に議論することなく、本稿ではBCR構文はRNR構文であると仮定する。RNR構文であるとするNeijt (1979)の分析に基づく議論に関しては、木村(2012a)を参照のこと。

分析には、Saito (1987) の RNR 要素の右方移動に基づく分析を除き、概略、等位項内に共通に生じている RNR 要素以外の要素、すなわち、残余要素 (remnants) に顕在的な焦点移動 (overt focus movement)、すなわち、残余要素の左方移動が適用される構文であるかどうかに関して違いがある。Sohn (1999), Kato (2003, 2006), Abe and Nakao (2012) は、残余要素の左方への顕在的焦点移動を仮定しているが、Mukai (2003), Sato (2010) は仮定していない。本稿の目的は、日本語の RNR 構文は残余要素に顕在的な焦点移動、すなわち、残余要素の左方移動が適用される構文ではないことを示すことにある。

1. 日本語の右枝節点繰上げに対する先行研究

1.1. 左方移動と PF 削除分析: Sohn (1999)

Sohn (1999: 368-369) は、空所化とは異なる特性 (2) に基づき、日本語と朝鮮語の BCR 構文は空所化構文ではなく RNR 構文であると論じている。

(2) Right Node Raising in Korean and Japanese (Sohn 1999: 369):

- 1) RNR is not allowed in the constructions other than coordination
- 2) There is no limit on the number of remnants
- 3) Postposition stranding is allowed in RNR
- 4) Unlike in Gapping, RNR doesn't obey the clause-mate condition and the distance between remnants can be very far; however, RNR still obeys island constraints
- 5) The gap appears in the first conjunct in the RNR

Sohn (1999) によれば、日本語や朝鮮語の RNR は空所化とは異なり、1) 等位構造以外の構文では許されない、² 2) 残余要素の数に制限はない、3) 後置詞の残留 (postposition stranding) が許される、4)

² Kato (2003, 2006) は、英語の RNR は、(i) に示されているように、等位構造やそれ以外の構造でも許されることがあるが、日本語では、(ii) で示されているように、等位構造を導く随意的な *so* 'and' に限られ、それ以外の接続詞 *sikasi* 'but', *aruwa* 'or', *atode* 'after', *toki* 'when' では認可されないことを指摘している。この特性を捉えるため、Kato (2003, 2006) では、AND Copy が提案されている。Sato (2010) は、Williams (1997) の [X, X]P → XP and XP という形式の二価の語彙項目の投射 (the projection of a bivalent lexical item) や等位構造削除 (CE) を仮定することで、等位構造に特有の現象であるということ捉えようとしている。

- (i) a. I am confident of a ~~successful outing at the track~~ and dependent on a successful outing at the track.
b. John interviewed people who like ~~potatoes~~ and people who dislike potatoes.
c. John was standing on a new ~~table~~, or on an old table.
- (ii) a. *John-ga hon-o keredomo Mary-ga hana-o katta
John-NOM book-ACC (bought) but Mary-NOM flower-ACC bought
'John (bought) books, but Mary bought flowers.' (Kato 2006: 2)
b. John-ga zassi-o 0v atode/node, Mary-mo hon-o katta
John-NOM magazine-ACC after/because Mary-also book-ACC bought
'After/Because (bought) a magazine, Mary also bought a book.' (Sato 2010: 313)

節仲間制約 (clause-mate condition) に従う必要はなく,³ 残余要素は主節と従属節に生じることが許されるが、島の制約 (island conditions, cf. Ross 1967) に従う、5) 空所は左側の等位項にある。⁴

1.2. 記号列削除 (String Deletion: SD) 分析: Mukai (2003)

Mukai (2003) は、削除の適用の対象となる記号列が構成素である必要のない、論理形式 (PF) 部門での同一性 (identity) に基づく記号列削除 (SD) 分析、すなわち、RNR 構文の分析として、移動を仮定しない分析を提案している。⁵

Mukai (2003) は、RNR 構文は構成素性 (constituency) に従わない SD によって導かれ、移動が適用されて導かれるのではないとの分析を提案している。移動が関与しているのであれば、島の条件効果 (island condition effects) が観察されるはずであるが、(3) に示されているように、島の条件効果が見られないからである。

³ Sohn (1999: 369) は、(i) に基づき、空所化に課せられる節仲間制約が課されないことを指摘している。

- (i) a. Tom-un phicca-lul, kuliko Jo-nun ayskrim-ul ku ay-ka cohahanta-ko mitnunta
Tom-TOP pizza-ACC and Jo-TOP icecream-ACC the boy-NOM like-COMP believe
'Tom, pizza and Jo believes that the boy likes ice cream' (Sohn 1999: 369)
- b. Tom-un phicca-lul_i ku ay-ka ~~t_i cohahanta-ko mitnunta~~ kuliko Jo-nun ayakrim-ul_j
Tom-TOP pizza-ACC_i the boy ~~t_i like-COMP~~ believe and Jo-TOP ice cream-ACC_j
ku ay-ka t_j cohahanta-ko mitnunta
the boy t_j like-COMP believe

(i) では、「Tomはその少年がピザが好きだと信じ、Joはその少年がアイスクリームが好きだと信じている。」という同一の節内の要素ではない Tom とピザが残余要素であり、節仲間制約に従っていない。なお、(i) には、節仲間制約に従った「その少年が Tom はピザが好きだと信じ、そしてその少年が Jo がアイスクリームが好きだと信じている。」という解釈も存在する。

⁴ Sato (2010: 318) は、後置詞の省略 (postposition-drop) に基づき、Saito (1987) の移動分析の不備を指摘している。Abe and Hoshi (1997) が指摘しているように、日本語では後置詞 *nituite* 'about' の省略が許される。

- (i) John-ga Bill, (sosite) Mary-ga Susan-nituite hanasita
John-NON Bill and Mary-NOM Susan-about talked
'John (talked about) Bill, and Mary talked about Susan. (Abe and Hoshi 1997:111)

RNR は、通常は、構成素に適用されるので、*nituite* と *hanasita* は非構成素であり、RNR の適用を受けることは無いという主張である。再分析 (reanalysis) のメカニズムに基づき、(i) を扱うことはできても、(ii) を扱うことはできない。再分析は付加詞と動詞には適用されないからである。

- (ii) John-ga kono riyuu-(de), (sosite) Mary-ga ano riyuu-de kubininatta.
John-NOM that reason-for and Mary-NOM that reason-for was-fired
'John (was fired) (for) this reason, (and) Mary was fired for that reason.' (Abe and Hoshi 1997:112)

(ii) の付加詞 *riyuu-(de)* の *de* と動詞 *kubininatta* が、再分析されることはない。この現象は、移動分析ではなく削除分析を支持する現象であるように思われる。なお、RNR 要素が非構成素であっても許される場合に関しては、Abbott (1976) や Kimura (1985) を参照のこと。

⁵ Mukai (2003) は、日本語の RNR 構文を *verbless conjunction* と呼んでいる。

- (3) Mike-ga raion-ni, Tom-ga [_{NP}kuma-ni osowareta otoko]-o tasuketa
 Mike-NOM lion-DAT Tom-NOM bear-DAT was:being:attacked man-ACC saved
 'Mike saved the man who was being attacked by a lion, and Tom saved the man who was being
 attacked by a bear.' (Mukai 2003: 210)

(3)の左側の等位項には、Mike-gaとraion-niが残余している。仮に、残余要素raion-niが移動操作の適用を受けているとするならば、抜き出し(extraction)操作に対する島(islands)である複合名詞句(complex NPs)の[_{NP}raion-ni osowareta otoko]からの抜き出しは許されず、非文法的となるはずであるが、実際は、文法的であるとの判断が示されている。これは、Mukai (2003)によれば、移動が関わっていないことを示す証拠である。(3)の派生に移動が関与しておらず、osowareta otoko-o tasuketaという構成素をなしていない記号列が削除されるというのが、Mukai (2003)のSDに基づく分析である。

Mukai (2003: 211)は、SDに課される唯一の構造条件(structural condition)は、削除される記号列が連続(continuous)し、動詞を含まなければならないという条件のみであると主張する。⁶この点を、次の(4)を例にとり、考えてみることにする。

- (4) a. *Tom-ga keeki-o, Mike-ga Mary-ni tyokoreeto-o ageta
 Tom-NOM cake-ACC Mike-NOM Mary-DAT chocolate-ACC gave
 'Tom gave a cake to Mary, and Mike gave a chocolate to Mary.'
 b. Tom-NOM ~~Mary-DAT~~ cake-ACC gave, Mike-NOM Mary-DAT chocolate-ACC gave

Mukai (2003)によれば、(4a)の非文法性は、削除されている記号列が連続していないことに起因する。すなわち、(4b)に示されているように、(4a)では、Mary-DATとgaveの不連続な記号列が削除されている。この結果として、(4a)が非文法的となっている。⁷

⁶ An (2007)も、i)RNR構文の削除される要素は線形的に隣接(linearly adjacent)していなければならない、ある要素がその間に介在することは許されない、ii)等位項の右側にある要素が削除されることを指摘している。Mukai (2003)やAn (2007)で指摘されている単一の最後の構成素の削除が必要であること、不連続な要素の削除が認められないこと、動詞が含まなければならないことは、RNRに課される右端制約(right edge restriction: RER)から導き出される特性である。右端制約(RER)に関しては、McCloskey (1986), Erteschik-Shir (1987), Oehrle (1991), Wilder (1999), Sabbagh (2003, 2007), Abels (2004), Bošković (2004), Ince (2009), 木村 (2011b, 2012a)を参照のこと。

⁷ (4)の目的語名詞句keeki-o/tyokoreeto-oに左方移動が適用され、削除される記号列が連続するようになると、右端制約(RER)が満たされ、(i)に示されているように、文法的となる。

- (i) a. Tom-ga keeki-o, Mike-ga tyokoreeto-o Mary-ni ageta
 Tom-NOM cake-ACC Mike-NOM chocolate-ACC Mary-DAT gave
 'Tom gave a cake to Mary, and Mike gave a chocolate to Mary.'
 b. Tom-NOM cake-ACC ~~Mary-DAT~~ gave, Mike-NOM chocolate-ACC Mary-DAT gave

Mukai (2003: 222) では、RNR 構文の特性として、1) 非構成素が RNR 要素として生じる、2) 下接の条件の効果が観察されない、3) PF 同一性条件が要求されることを指摘し、構成素性に基づかない記号列削除 (SD) 分析が提案されている。

1.3. 記号列空虚移動 (String-Vacuous Movement: SVM) 分析 : Abe and Nakao (2012)

顕在的統語移動 (overt syntactic movement) では、通常、語順 (word order) が変わるが、語順の変わらない記号列空虚移動 (SVM) がある。この SVM に基づく RNR 構文の分析を、Abe and Nakao (2012) は提案している。SVM とは、概略、(5) に示されている移動のことである。



(5) に示されているように、 t_α の位置から α の位置への移動において、記号列の語順が変わることはない。このような移動は、(6a, b) の文法性で示されているように、主語位置に WH 疑問詞が生じ、主語と助動詞の倒置 (subject-auxiliary inversion) が起こらない場合に仮定されている移動である。

- (6) a. Who left?
b. *Who did leave?

(6a) は文法的であるが、(6b) は非文法的である。これは、主語位置に WH 疑問詞がある場合に、主語と助動詞の倒置が起こらないことを示している。一般的には、WH 語は節 (CP) の指定辞にあると仮定されているので、(6a) でも、WH 語 who の CP 指定辞への WH 移動が適用されるが、語順に変更が生じることはない。この移動が SVM である。

Abe and Nakao (2012) は、日本語の RNR 構文に対する SVM に基づく分析⁸を提案し、RNR 残余要素は、基本的には島の条件に従うが、島の効果が観察されない場合は、残余要素が島の左端 (left edge) にある場合、すなわち、焦点 (focus) 移動が記号列空虚 (string-vacuous) の場合であるとの分析を提案している。他方、Mukai (2003) とは異なり、RNR 残余要素が島の左端にない時、また、残余要素が付加詞である時には島の条件効果が表れると主張する。この点を、(7a, b) を例にとり、考えてみることにする。

(i) が文法的なのは、目的語名詞句の左方移動により、Mary-DAT と gave という連続する記号列が削除されているからである。

⁸ Abe and Nakao (2012) は、RNR に対して、残余要素が焦点移動され、最初の等位項での T' 削除 (T'-deletion) が適用されるとする分析を提案する Abe and Hoshi (1997) の空所化分析を仮定している。

- (7) a. * John-wa kuma-ni, sosite Mary-wa raion-ni Bill-ga osowareta koto-o
 John-TOP bear-by and Mary-TOP lion-by Bill-NOM attacked fact-ACC
 minna-ni itta
 everyone-DAT told
 'John _ by a bear, and Mary told everyone that Bill was attacked by a lion.'
- b. * John-wa munoosa-no tameni, sosite Mary-wa mudan kekkin-no
 John-TOP incompetent-GEN because and Mary-TOP absence-without-notice-GEN
 tameni kubi-ninatta hito-o nagusameta
 because be-fired person-ACC comforted
 'John _ because of his incompetence, and Mary comforted a person who was fired because of
 his absence without notice.' (Abe and Nakao 2012: 4)

(7a) の RNR 残余要素 kuma-ni は島の左端になく, (7b) の残余要素 munoosa-no tameni は付加詞であり, (7a, b) では島の条件効果が観察されるとの判断が Abe and Nakao (2012) で示されている。

Abe and Nakao (2012) によれば, Mukai (2003) が島の条件効果が観察されないと分析した (3) は, 残余要素が島の左端にあり, 焦点移動が記号列空虚である場合であるということになる。RNR 構文で島の条件効果が観察されないのは, RNR の残余要素が項 (argument) であるか, それとも, 島の左端にある時であるというのが Abe and Nakao (2012) の分析である。島の条件効果が観察されない場合の (8a) と観察される場合の (8b) に対する SVM に基づく分析を簡単に概観することにする。

- (8) a. [= (3)] Mike-ga raion-ni, Tom-ga [_{NP}kuma-ni osowareta otoko]-o tasuketa
 Mike-NOM lion-DAT Tom-NOM bear-DAT was:being:attacked man-ACC saved
- b. [= (7)] *John-wa kuma-ni, sosite Mary-wa raion-ni Bill-ga osowareta koto-o
 John-TOP bear-by and Mary-TOP lion-by Bill-NOM attacked fact-ACC
 minna-ni itta
 everyone-DAT told

Abe and Nakao (2012) によれば, (8a) は焦点移動が残余要素 raion-ni/kuma-ni に適用され, 島の左端に SVM がなされている。この移動は, 非顕在的移動 (covert movement) である。他方, (8b) は SVM ではない。Kuna-ni/raion-ni と述語 osowareta の間に主語 Bill-ga が介在しているからである。これは顕在的移動 (overt movement) であり, 島の条件効果が生じ, (8b) は非文法的となる。

2. 日本語の右枝節点繰上げと削除分析

本節では、日本語の RNR 構文の諸特性を適切に捉えるために、全域的 RNR 構文の in-situ 削除分析を簡単に概観する。

(9) 全域的 RNR 構文の in-situ 削除分析 (Kimura 1985, 1986, 木村 2011a, b, 2012a, b) :

RNR 要素は、一番右側の等位項内にある。

木村 (2011a, b, 2012a, b) は、(9) に示されているように、全域的 RNR 構文の共通項である RNR 要素は一番右側の等位項内にあり、それ以外の等位項 (non-final conjunct (s)) の RNR 要素に対応する要素には削除が適用されるとする分析を提案している。⁹ 本稿では、Mukai (2003) と同様に、日本語の RNR 構文は、(10) に示されているように、逆行削除 (backward deletion) の適用で導かれると仮定している。

(10) Backward deletion in the non-final conjunct (s) (cf. Mukai 2003)

日本語の RNR 構文は、一番右側の等位項以外での逆行削除の適用で導かれる。

本稿の分析が正しいとすると、英語と日本語において、RNR 構文の派生過程が同一であることになる。すなわち、英語であれ日本語であれ、移動 (movement) ではなく削除 (deletion) が適用されて導かれることになる。日本語の RNR 構文が移動ではなく削除が適用されて導かれることを第3節で概観する。¹⁰

3. RNR 構文と残余要素の左方移動

3.1. 島の条件効果と文法性に関する判断の違い

日本語の RNR 構文の派生に関しては、第1節で概観したように、残余要素 (remnants) が左方に顕在的に移動されるとする分析が提案されている。例えば、Sohn (1999: 380) では、RNR 構文は、等位項内の残余要素と対応する要素が顕在的にかき混ぜ (scrambling) の適用の後に、同一性のもとに音声形式部門 (PF) での削除の適用がなされて導かれるとの分析が提案されている。

(11) [= (1)] John-ga Mary-ni, sosite Bill-ga Susan-ni kiskusita

(12) [_{IP} John-ga₁ [_{IP} Mary-ni₂ [_{IP} t₁ t₂ kiskusita]]] sosite [_{IP} Bill-ga₃ [_{IP} Susan-ni₄ [_{IP} t₃ t₄ kiskusita]]]

⁹ RNR の削除分析に対しては、Neijt 1979, George 1980, Wexler and Culicover 1980, Banfield 1981, Hartmann 2000, Bošković 2004, Ha 2006a, b, Chalcraft 2006, Ince 2009, An 2009, Barros and Vicente 2011 を参照のこと。

¹⁰ Abe and Nakao (2012) は、RNR 構文が全域的 (across-the-board: ATB) 規則適用に基づき導かれるとする Ross (1967) の分析を擁護する Sabbagh (2007) の ATB 移動分析に基づく分析を仮定している。

(12) の表示は、焦点化された句が多重に顕在的移動、すなわち、かき混ぜの適用を受けて、顕在的統語論 (overt syntax) において得られる表示である。この表示が音声形式部門 (PF) において、左側の等位項で削除が適用され導かれるのが (11) である。顕在的移動が RNR 構文に関与しているとする証拠に、島の条件 (island conditions) 効果が観察されることが指摘されている。

- (13) a.?? John-i piano-lul, kuliko Bill-i kitha-lul Mary-ka cal chintanun
 John-NOM piano-ACC and Bill-NOM guitar-ACC Mary-NOM well play
 sasil-ul anta
 fact-ACC know
 'John, piano and Bill knows the fact that Mary plays guitar very well.'
- b.?? Tom-i phicca-lul, kuliko Jo-ka ayskrim-ul ku ai-ka cohahanum-ci
 Tom-NOM pizza-ACC and Jo-NOM icecream-ACC the boy-NOM like-Q
 alko sipehanta
 want to know
 'Tom, pizza and Jo wants to know whether the boy likes ice cream'
- c.?? John-i chayk-ul, kuliko Mary-ka inhyeng-ul san tuy-ey pap-ul mekessta
 John-NOM book-ACC and Mary-NOM doll-ACC buy after meal-ACC had
 'John, a book and Mary had a meal after she bought a doll.' (Sohn 1999: 369)

(13a) は内容節 (content clauses), (13b) は WH 節 (WH-islands), (13c) は付加節 (adjunct clauses) からの残余要素の抜き出し (extraction) がなされており, Sohn (1999) の判断によれば, 島の条件に違反し, 非文法的である。

Abe and Nakao (2012) は, RNR 残余要素が島の左端にない時, また, 残余要素が付加詞である時に, 島の条件効果が表れるとする分析を提案している。

- (14) [= (7)] a. * John-wa kuma-ni, sosite Mary-wa raion-ni Bill-ga osowareta koto-o
 John-TOP bear-by and Mary-TOP lion-by Bill-NOM attacked fact-ACC
 minna-ni itta
 everyone-DAT told
- b. * John-wa munoosa-no tameni, sosite Mary-wa mudan kekkin-no
 John-TOP incompetent-GEN because and Mary-TOP absence-without-notice-GEN
 tameni kubi-ninatta hito-o nagusameta
 because be-fired person-ACC comforted

(14a)の残余要素 *kuma-ni* は島の左端になく、(14b)の残余要素 *munoosa-no tameni* は付加詞である。RNR構文の残余要素が項でもなく、島の左端にもないので、(14)は非文法的であるとの分析が提案されている。

Sohn (1999)や Abe and Nakao (2012)とは異なり、Neijt (1979)や Mukai (2003)や Sato (2010)では、(15)や(16)に基づき、島の条件効果が観察されないことが指摘されている。

(15) a. 等位構造制約 (CSC)

*Alfonse cooked the beans ~~and the rice~~ and Harry cooked the potatoes and the rice.

b. 文主語制約 (SSC)

That Alfonse cooked ~~the rice~~ and that Harry ate the rice is fantastic.

c. 複合名詞句制約 (CNPC)

Alfonse discussed the question of which rice ~~we would eat~~ and Mary discussed the question of which beans we would eat.

(16) [= (3)] Mike-ga raion-ni, Tom-ga [_{NP} kuma-ni osowareta otoko]-o tasuketa
Mike-NOM lion-DAT Tom-NOM bear-DAT was:being:attacked man-ACC saved

Neijt (1979)は、(15)のデータに基づき、CSCを除き、英語のRNRでは島の条件効果が観察されないことを指摘している。同様に、Mukai (2003)は、(16)に基づき、日本語のRNRでも島の条件効果が観察されないことを指摘している。

Mukai (2003: 215-216)は、更に、RNR構文には左方移動が関与し、島の条件、すなわち、下接の条件 (subjacency) に違反することにより、文法性が低下するとする分析を批判している。この点を、(17a, b)を例にとり、考えてみることにする。¹¹

(17) a. Mike-ga raion-ni, Tom-ga [_{NP} [_{IP} pro kuma-ni osowareta] otoko]-o tasuketa.

Mike-NOM lion-DAT Tom-NOM bear-DAT was attacked man-ACC saved

'Mike saved the man who was being attacked by a lion, and Tom saved the man who was being attacked by a bear.' (Mukai 2003: 215)

b. Tom-ga *Lakers-ni*, Mike-ga Nets-ni Bulls-ga katu to omotteita.

Tom-NOM Lakers-DAT Mike-NOM Nets-DAT Bulls-NOM defeat COMP thought

'Tom thought that Bulls would defeat Lakers, and Mike thought Bulls would defeat Nets.'

(Mukai 2003: 216)

¹¹ Sato (2010: 319)は、Mukai (2003)の指摘する(17)の観点から、Abe and Hoshi (1997)の左方移動に基づく分析を批判し、等位構造省略(CE)と従属部省略(DE)に基づく分析が優れていることを論じている。

(17a)の残余要素 raion-niは統語上の島を構成する関係詞節 (relative clauses) を含む複合名詞句 (complex noun phrases) 内にあるが, (17b)の Lakers-niは統語上の島の中にはない。RNR構文の残余要素に左方移動が適用されているとするならば, 統語上の移動に課される下接の条件に基づき, 文法性の違いが観察されることが期待される。すなわち, 下接の条件に違反する(17a)は非文法的で, 違反しない(17b)は文法的であることが期待される。しかしながら, Mukai (2003)によれば, 調査結果は期待される数値と大きくかけ離れている。(17a)を文法的と判断する被検者は43名中37名で, (17a)を非文法的で(17b)を文法的であると判断した被検者は1人もいなかったことが報告されている。

3.2. 格標識や後置詞の脱落

島の条件効果があるとの主張に対して, 移動に課される島の条件以外の要因で文法性が低くなっていると, Kato (2006: 51)は主張する。この点を, 次の(18)を例にとり, 考えてみることにする。

- (18) a.?? Harry-ga **imiron**, sosite Alfonse-ga toogoron-o kenkyuusiteiru
 Harry-NOM semantics and Alfonse-NOM syntax-ACC is studying
 genngogakusya-ni atta
 linguist-DAT met
 'Harry met a linguist who studies demantics and Alfonse syntax.' (Abe and Hoshi 1997: 115)
- b. ? Harry-ga **imiron-o**, sosite Alfonse-ga toogoron-o kenkyuusiteiru
 Harry-NOM semantics-ACC and Alfonse-NOM syntax-ACC is studying
 genngogakusya-ni atta
 linguist-DAT met (Kato 2006: 51)

(18a)は, Abe and Hoshi (1997)で文法性が低いと判断され, この文法性の低さは移動に課される島の条件効果であるとされている。この主張に対して, Kato (2006)は, (18a)の文法性の低さは島の条件効果に因るのではなく, imiron 'semantics'において格標識 (case-markers) や後置詞が脱落していることに因るとの分析が示されている。例えば, (18b)のように, 格標識/後置詞 -oが付加されることで, 文法性の向上が見られるとの主張がなされている。静岡県立大学の坪本篤朗氏(個人談話)から, 格標識の脱落は, くだけた口語的スピーチ (colloquial Japanese Speech) で見られることが多く, 文末に不変化詞 (particles) の助詞 -yoや -zo等が付加され, (19)のように, カジュアルな意味合いが込められると, (18a)の文法性でさえ上がるとのご指摘をいただいた。

- (19) Harry-ga imiron, sosite Alfonse-ga toogoron-o kenkyusiteiru
 Harry-NOM semantics and Alfonse-NOM syntax-ACC is studying
 genngogakusya-ni atta-yo/zo.
 linguist-DAT met-PARTICLE

格標識や後置詞の脱落が文法性の低下を招いているとするならば、RNR構文の派生に左方移動が関与し、島の条件への違反の結果として、文法性が低くなっているとは言えないことになる。

3.3. 左枝条件効果

RNR構文に左枝条件 (left branch condition: LBC) の効果が観察されないということは、RNR構文の残余要素に左方移動 (leftward movement) が関与していないことを示す証拠となる。Sato (2010: 322-323) では、Kim (1997) の統語的移動と PF 削除に基づく分析で説明することのできない現象として、RNR構文に左枝条件 (LBC) の効果が観察されないことが指摘されている。

- (20) a. Nina-wa Ana-no (sosite) Lydia-wa Tomo-no kuruma-o untensita.
 Nina-TOP Ana-GEN and Lydia-TOP Tomo-GEN car-ACC drove
 'Nina (drove) Ana's (car) and Lydia drove Tomo's car.'
 b. * Tomo-no_i Lydia-wa _{t_i} kuruma-o untensita.
 Tomo-GEN Lydia-TOP car-ACC drove (An 2007:145-146)

左方移動に基づく分析では、(20a) は、より大きな名詞句 Ana-no/Tomo-no kuruma-o から Ana-no/Tomo-no が抜き出されることにより導かれることになる。しかしながら、この移動は、(20b) で示されているように、LBC に違反し、許されないはずであるが、(20a) は、実際は文法的である。(20a) において LBC の効果が見られないということは、RNR構文に残余要素の左方移動が関与していないということを示している。¹²

¹² Abe and Nakao (2012) の記号列空虚移動 (SVM) 分析では、(20a) が文法的であるのは、この移動は非顕在的な SVM であり、(20b) が非文法的であるのは、顕在的移動が適用されている結果であると分析することになる。Abe and Nakao (2012) が提案する SVM に基づく非顕在的移動と顕在的移動の観点での左枝条件効果が関わる現象に対する分析を、島の条件効果が関わる現象との比較のもとで検討してみると、SVM を仮定することで、Mukai (2003) が指摘する島の条件効果が存在しないことに対して説明を与えることができたのと同様な形で、左枝条件効果が観察されないことに対して説明を与えることができないように思われる。

4. まとめ

日本語のRNR構文の分析として、等位項内に共通に生じているRNR要素以外の要素、すなわち、残余要素 (remnants) に顕在的な焦点移動 (overt focus movement), すなわち、残余要素の左方移動が適用されるという分析が提案されている。RNR構文の残余要素の左方移動に基づく分析に Sohn (1999), Kato (2003, 2006), Abe and Nakao (2012) がある。本稿では、i) 島の条件効果に関する文法性の判断に違いがあり、下接の条件効果が観察されないこと、ii) 格標識や後置詞の脱落による文法性の低下は島の条件とは異なる要因による可能性があること、iii) 左枝効果から属格名詞句が左方移動されることがないことに基づき、日本語のRNR構文は、残余要素に顕在的な焦点移動、すなわち、残余要素の左方移動が適用されて導かれる構文ではないことを論じた。

参考文献

- Abbott, Barbara 1976. "Right Node Raising as a Test for Constituenthood," *Linguistic Inquiry* 7, 639-642.
- Abe, Jun and Hiroto Hoshi 1997. "Gapping and P-Stranding," *Journal of East Asian Linguistics* 6, 101-136.
- Abe, Jun and Chizuru Nakao 2012. "String Vacuity under Japanese Right Node Raising," *Formal Approaches to Japanese Linguistics 5 (FAJL 5)* [MIT Working Papers in Linguistics 64], 1-14.
- Abels, Klaus 2004. "Right Node Raising: Ellipsis or Across the Board Movement," *Proceedings of the North East Linguistic Society* 34, 45-59.
- An, Duk-Ho 2007. *Syntax at the PF Interface: Prosodic Mapping, Linear Order, and Deletion*. Ph.D. Dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Banfield, Ann 1981. "Stylistic Deletion in Coordinate Structures," *Linguistic Analysis* 7, 1-32.
- Barros, Matthew and Luis Vicente 2011. "Right Node Raising Requires both Ellipsis and Multidomination," *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 17, 1-9.
- Bošković, Željko 2004. "Two Notes on Right Node Raising," *University of Connecticut Working Papers* 12, 13-24.
- Chalcraft, Faye 2006. "Right Node Raising as Ellipsis: Evidence from (What the) British do," *Snippets* 12, 7-8.
- Erteschik-Shir, Nomi 1987. "Right Node Raising," *MIT Working Papers in Linguistics* 9, 105-117.
- George, Leland M. 1980. *Analogical Generalizations of Natural Language Syntax*. Ph.D. Dissertation, MIT.
- Ha, Seungwan 2006a. "Multiple Dominance CAN'T, but Ellipsis CAN account for Right Node Raising," *CLS 42-1: The Main Session (Papers from the 42nd Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society)*, 17-32.
- Ha, Seungwan 2006b. "An Ellipsis Account of Right Node Raising in Korean," (To appear in *Proceedings of Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL 3)*).
- Hartmann, Katharina 2000. *Right Node Raising and Gapping: Interface Conditions on Prosodic Deletion*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Ince, Atakan 2009. "On Right Node Raising," *Proceedings of the 5th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL 5)* [MIT Working Papers in Linguistics 58], 165-180.
- Kato, Kumiko 2003. "On Japanese Gapping in Minimalist Syntax," *Proceedings of the 19th Northwest Linguistics Conference* (Working Papers of the Linguistics Circle of the University of Victoria), 55-64.
- Kato, Kumiko 2006. *Japanese Gapping in Minimalist Syntax*. Ph.D. Dissertation, University of Washington.
- Kim, J-S 1997. *Syntactic Focus Movement and Ellipsis: A Minimalist Approach*. Ph.D. Dissertation, University of

Connecticut, Storrs.

- Kimura, Norimi 1985. "An Interpretive Analysis of Right Node Raising in English," *Tsukuba English Studies* 4, 63-88.
- Kimura, Norimi 1986. "Right Node Raising: A Null Anaphor Analysis," *English Linguistics* 3, 118-133.
- 木村宣美 2011a. 「2種類の右枝節点繰上げ構文」『人文社会論叢』（人文科学篇）第25号 弘前大学人文学部 1-12.
- 木村宣美 2011b. 「全域的右枝節点繰上げ構文と削除分析」日本中部言語学会 *Ars Linguistica* 18, 17-35.
- 木村宣美 2012a. 「日本語の逆行等位構造縮約」『人文社会論叢』（人文科学篇）第27号 弘前大学人文学部 37-57.
- 木村宣美 2012b. 「右枝節点繰上げ構文：削除分析と多重支配分析」『日本言語学会第145回大会予稿集』日本言語学会, 208-213.
- McCloskey, James 1986. "Right Node Raising and Preposition Stranding," *Linguistic Inquiry* 17, 183-186.
- Mukai, Emi 2003. "On Verbless Conjunction in Japanese," *Proceedings of the North East Linguistic Society* 33, 205-224.
- Neijt, Anneke 1979. *Gapping: A Contribution to Sentence Grammar*. Dordrecht: Foris.
- Oehrle, Richard T. 1990. "Categorial Frameworks, Coordination, and Extraction," *Proceedings of the Ninth West Coast Conference on Formal Linguistics*, 411-425.
- Ross, John R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Ph.D. Dissertation, MIT. (Reproduced by the Indiana University Linguistics Club 1968)
- Sabbagh, Joseph A. 2003. "Ordering and Linearizing Rightward Movement," *Proceedings of the Twenty-Second West Coast Conference on Formal Linguistics*, 436-449.
- Sabbagh, Joseph A. 2007. "Ordering and Linearizing Rightward Movement," *Natural Language & Linguistic Theory* 25, 349-401.
- Saito, Mamoru 1987. "Three Notes on Syntactic Movement in Japanese," In *Issues in Japanese Linguistics*, ed. by Takashi Imai and Mamoru Saito, 301-350. Dordrecht: Foris.
- Sato, Yosuke 2010. "Coordination, Dependency, and Gapping in Japanese," *Proceedings of the 6th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL 6)* [MIT Working Papers in Linguistics 61], 309-324.
- Sohn, Keun-Won 1999. "Deletion or Copying? Right Node Raising in Korean and Japanese," *Proceedings of the Nanzan GLOW*, 367-384.
- Wexler, Kenneth and Peter W. Culicover 1980. *Formal Principles of Language Acquisition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Wilder, Chris 1999. "Right Node Raising and the LCS," *Proceedings of the Eighteenth West Coast Conference on Formal Linguistics*, 586-598.
- Williams, Edwin 1997. "Blocking and Anaphora," *Linguistic Inquiry* 28, 577-628.